

《研究ノート》

## 文学を通して考える教養教育

——ロビンソン・クルーソーを中心にして——

深 澤 清

### はじめに

この研究ノートは、イギリスの作家 Daniel Deofe (ダニエル・デフォー, 1660-1731) の小説 *Robinson Crusoe* (ロビンソン・クルーソー) を基盤にして、大学生の教養教育について述べたものである。すなわち、大学生の姿をこの作品の主人公であるロビンソンの姿に仮託し、主体的に学ぶ姿勢、新しい知識を吸収し統合する力、そして異文化との交流を通して自己確立する術について言及している。小説の梗概は「孤島でのロビンソン・クルーソーの生活を描いたもの」という程度で十分であり、作品を読んだことがない人でも理解してもらえるように配慮した。また、小説の内容を細かく分析した堅いものにならないように工夫した。さらに、大学生の社会的・職業的自立に関連するものを取りあげ、これからの大学教養教育への提言も併せて行った。

この作品に関しては、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1719) と、その続編である *The Farther Adventures of Robinson Crusoe*, 1719) の2巻、そしてその翌年の『ロビンソン・クルーソー反省録』(*Serious Reflections During the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe: With his Vision of the Angelick World*, 1720) の計3巻で構成されている。本来であれば3巻を鳥瞰的に眺める必要があるが、ここでは一般的に広く読まれている『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』を中心に扱うことにする。

### ロビンソンの〈経験〉とは

ロビンソン・クルーソーが育った家庭は経済的にも恵まれ、ロビンソンは日々の生活に困ることはなかった。将来は約束され順風満帆の様相を呈していたが、それでも彼は自己充実感が得られなかった。この状況は「自立」における「分離」(separation) と「個人化」(individualization) という2つの過程で説明できそうだが、実際はそう単純ではない。明白なのは、ロビンソンが求めたものは父親のもとを離れ、外的な経験を通して環境に順応し、自らの空間を再構築することにあった。その背景としては、1. 商業的には1600年12月にイギリスが、そして1602年3月にはオランダがそれぞれ「東インド会社」を設立し、未知の世界との貿易を目指す商業航海の発展があったこと。2. 思

想的にはイギリスの「経験論」の流れがあったこと。すなわち、イギリスの哲学者ジョン・ロック (John Locke, 1632-1704)、ジョージ・バークリー (George Berkeley, 1685-1753)、そしてデイビット・ヒューム David Hume, 1711-1776) の存在がある。人は世界の一部であり、精神と身体は相互に作用しながら積極的に世界に働きかけ、自らの人格を形成していく。人が世界の一部であることを認識する根拠となるものが人間の理性であり、ロックは抽象的思考にとらわれることのない人間の理性を重視した。ロビンソンが航海に出たのも、先の「東インド会社」が株式による資金調達システムを完成させ、貿易によって商業航海を展開していく世の趨勢があったからであろう。それは今風の言葉で言えば「経営のグローバル化」と言えるかもしれない。

さて、何の心配もなくそこに落ち着いて住むこと、またはその境遇・立場に満足することを「安住」という。「安住」という名にふさわしいはずの「親元」から、ロビンソンは離れていった。なぜなら、彼に何らかの疑念 (doubt) が芽生え、それが彼の思考を動かしたからである。その歩みは疑念が信念 (belief) にかわる時まで続くはずである。すなわち、＜信念＞は＜疑念＞を解決する機能を持つ。「疑念が刺激となって信念に達しようとする努力」を C・S パースは「探求」(inquiry) と名付けたが、ロビンソンの歩みもこの探求に似ている。

I would be satisfied with nothing but going to sea;<sup>1)</sup>

私はどうしても船乗りにならなければ気がすまなかった。

理想的な空間に留まる行為は、ある意味では「道徳的 (モラーリッシュ)」であり、幸福というものが前提として存在し、その中ではいかなる態度をとるべきかが求められる。それはまるで大人が子どもに豪華な個室を与え、その中で子どもに従順さを求める時のように。個室といういわば楽園の中では、「リンゴを食べてはいけない」という戒律が存在し、子どもに精神的な抑圧を与える。一方、理想空間から離れる行為は、自らの幸福を求めて旅立つことに価値をおくものである。それはまるで、楽園を追放された人のように。「プラグマティッシュ」は常に仮言的に勧告し、「モラーリッシュ」は絶対的・定言的に命令する。

どうしても海に出たいというロビンソンの主張に対して、父親は必死で説得を重ねた。その言葉は非国教会派、または広い意味での清教徒であった著者デフォーの考えを代弁するものであり、一言でいえばそれは「中庸」の重要性を説くものであった。

that the middle station of life was calculated for all kind of virtue and all kind of enjoyments; that peace and plenty were the handmaids of a middle fortune; that temperance, moderation, quietness, health, society, all agreeable diversions, and all desirable pleasures, were the blessings attending the middle station of life; that this way men went silently and smoothly through the world, and comfortably out of it,<sup>2)</sup>

中くらいの生活はあらゆる美德、あらゆる楽しみの原点であり、中庸の暮らしには平和と豊かさを示す侍女がいる。また、ここには様々な祝福がある。たとえば、節制や中庸、健康や社交、

さらにあらゆる心地よい娯楽、あらゆる望ましい楽しみがある。このようにして人間は静かに穏やかに世間を渡っていき、また楽しくこの世を去っていく。

上記、ロビンソンの父（著者デフォー）の言葉には、旧約聖書の箴言（30:7～30:9）の部分が織り込まれているのは明白である。<sup>3）</sup>人は財産に頼って神への信頼を失うかもしれない自身の罪深さや、逆に貧しさのあまり、人のものにつけてしまいかねない自分の弱さを併せ持つ。ロビンソンの「父」の説得は、神である「父」の聖書の言葉と重なり、ロビンソンの脳裏に焼き付いた。実際、無人島での極限状況の生活においても、ロビンソンは絶えずその言葉を気にかけていた。

ロビンソンは自分がおかれている状況に対して当初は暗い見通ししか持てなかったが、次第にどんな悲境にあっても心を励ましてくれる「何か」(something) に希望を託し、新しい境遇に馴染めるようになっていった。ロビンソンの選択（信念）は行動へと移り、歩き出すことで新たな空間を形成していく。ロビンソンは歩き出さなければならなかった。なぜなら、歩き出すことで新たな空間を経験し、実証可能な自らの経験の拡大、つまり「経験の地平」を拡大させるからである。経験は外に向けられ、視覚や思考は探索するための手段となる。また、経験は受動性という意味を含み、人が精神的・肉体的に堪え忍んだ結果を意味する。だから、経験豊かな人というのは、身の上に多くのことがあった人のことをいう。経験するとは、与えられたものに働きかけて、そこから何かを生み出すことである。

〈経験〉という言葉について考えてみれば、英語の experiment(実験)、experience(経験)、expert(熟練者)、perilous(冒険的な)という語には、どれも共通の語根として per が存在する。per とは印欧語の祖語では「向こうへ行く (=go across)」の意味であり、そこから「向こうに行く行動をとる」という意味のラテン語 experiri (ためす、しらべる)になる。perilous の語幹 peri- はラテン語では peritus(経験のある)となり、試練を表す意味となる。経験が豊かになれば expert(熟練者)となる。また、experiri の名詞形 experimentum「ためすこと、しらべること」が古フランス語の綴りをそのまま英語が引き継ぎ experiment「実験」という単語になる。一方、experiri から派生して「繰り返し試して得た知識」という意味の experientia が生まれ、古フランス語の綴りが残って experience「経験」となる。

さらに別な見方をしてみると、experiment「実験」と experience「経験」の中にある experi- は、漢字の「験」に置き換えて考えることができる。「験」という漢字の右にある旁は、ものを集めている人の姿であり、偏の馬と組み合わせれば、「馬を集めて乗り比べをする」→「ためす、しらべる」という意味になる。この漢字の減画略字である「驗」とすれば、旁の中に人々の姿がはっきりと見えるだろう。「験」の字にはその昔、馬屋に人々が集まり、自分の背丈、相性に合った馬を選び、吟味している様子が刻まれている。自分の馬を選ぶのも一つの人生経験である。

## 目には見えない〈圧力〉とは

ロビンソンは絶海の孤島に独り立ち、悲しみのどん底に突き落とされる。荒涼とした景色に囲まれ静寂な空間に包まれる時、人は原初的な意味での「孤独」を体感する。孤独な「私」と外界との境

界は皮膚であり、皮一枚で外界との区別がなされる。「空気」(atmosphere)とは実に不思議な存在であり、肉眼では見えない層が上空までつながっている。人はいわば空気の底で生き、空気の重みを全身で受けとめている。

身体を圧迫するものには様々な存在があるが、「押さえる、圧迫する」という意味をあらわす英語の press について考えてみると興味深いものがある。英語の press (圧する)はラテン語 premere の過去分詞形 pressum から来ているが、press という単語に接頭辞を付けると、何をどのように〈圧迫〉しているのかがイメージされやすい。例えば、空気を圧縮する compress (圧縮する)は一般的に「物や気体を圧する」という意味で使われる。つまり、「com-(すっかり) + press(圧する)」となる。圧力が下向きになると「de-(下方に) + press(押す、圧する)」となり、この depress には物理的な意味と精神的な意味の両方がある。力を加えて下方方向に押せば「抑圧」となり、精神的には「憂鬱」の意味になる。また、感情や言葉を外に押し出せば、「ex-(外に) + press(押す、圧する)」となって expression (表現、表情、言い回し)の意味となり、反対に心の中に印象などを押し込めば、「im-(中に) + press(押す、圧する)」となって impression (印象、感想、印刷)となる。また、repress (抑える、抑制する、制御する)は「re-(あとへ) + press (圧する)」というイメージであり、心から湧き上がる感情を再び中へ押し戻し、衝動や欲求などを抑制することを意味する。そして最後に、「op-(…に向かって) + press (圧する)」は政治的な圧力を加えることを意味する oppression (圧制、虐待)となり、国民などを圧迫することになる。

父の警告を無視して航海に出たロビンソンは様々な「圧迫」を感じていたが、ふとある時、後悔の念に駆られることもあった。

I had got into an employment quite remote to my genius, and directly contrary to the life I delighted in, and for which I forsook my father's house, and broke through all his good advice. Nay, I was coming into the very middle station, or upper degree of low life, which my father advised me to before, and which, if I resolved to go on with, I might as well have stayed at home, and never have fatigued myself in the world as I had done; and I used often to say to myself, I could have done this as well in England, <sup>4)</sup>

こういう仕事のために自分は父の家も捨て、父のあらゆる親切な忠告もはねつけたのであろうか。妙なことだが、私はいま中くらいの生活、言葉をかえていえば、下層階級の上の部の暮らしにはいろいろとしていた。しかし、これこそ前に父が私にすすめたところのものではなかったのか。もしこのままこういう生活を続けていくとすれば、故郷にとどまっているのと同じことで、なにもあれほどの苦しみをなめる必要もなかったはずだ。

父親が主張する「中庸」の意義を嫌って航海に出たロビンソンであったが、結局は「中庸」の世界に留まる自分に気がついた。経験は自己を客観的に捉え直し、自己分析をした後、その結果を言葉で表現(作文)する機会を我々に与えてくれる。つまり、経験を通して自身を知り、言葉によって「マニフェスト(宣言)」することができるのである。この作品の中でロビンソンが妄想にふけり、独白が多いのはこのような理由からである。それは先に引用したデフォーの英文の記述方法にもあらわ

れている。例えば、本来ならば一呼吸で読める箇所にカンマやフルストップを置き、短いセンテンスを多用している点があげられる。つまり、一言一言が次の行動に至るための内省材料になっている。

結局、人は言葉を用いてしか生きていけない、一つの苦悩がある。言葉は「言霊」であり、霊的な魂が込められている。〈自分を表現する〉ことは、自分についての〈情報の収集〉部分と、それを解析して整理する〈編集作業〉、そしてそれを〈言語処理〉して他者に発信するための〈表現力〉が必要である。経験とは目には見えない〈圧力〉となって、次の行動の基盤となる。

## 自分を知るための術

より良い経験をするためには、ただ盲目的に前進するのではなく、いわば行動するための「芸術」が必要である。例えば、自分が歩いた場所の地図を書いたり、スケッチをしたりする時には「創造性」が求められ、また、美しい自然を保全する気持ちが芽生えれば「環境問題」に関心を持つようになる。さらに、諸外国を旅すれば様々な国民とその文化に触れ、お互いを知る機会に恵まれ「国際性」を養うことができる。相手を知れば他人を敬う気持ちになり、それが「世界平和」へとつながっていく。

人の「歩み」はまず現在地の把握から始まる。自分の位置が確定しなければ目的地への方向が定まらず、その歩みは単なる放浪となり、場合によっては徘徊を繰り返すことになる。認識論について語る場合、伝統的な「時」と「空間」の問題は避けて通れないが、ロビンソンの行動には地図化、今風の言葉で言えば「行動フローチャート」が既に存在している。例えば、ロビンソンは次のように、簿記でいうところの「貸借対照表」(バランスシート)の方法を用いて自己分析を行っている。

I now began to consider seriously my condition, and the circumstances I was reduced to; and I drew up the state of my affairs in writing, ... I began to comfort myself as well as I could, and to set the good against the evil, that I might have something to distinguish my case from worse; and I stated very impartially, like debtor and creditor, the comforts I enjoyed against the miseries I suffered, thus:<sup>5)</sup>

自分のおかれている境遇、自分が今おちこんでいる苦境というものを私はまじめに考え始めた。そして私は自分の今の状況を書いてみた。・・・しだいに私は自分が理性の力をかりて暗鬱な気持ちをおさえることができるようになるにつれ、できるだけ我とわが身を慰め、良い点と悪い点とを並べてみて、へたをするともっと悪い場合もありうると思うが、私は公平に簿記でいう貸方と借方という具合に、自分が恵まれている有利な点と苦しんでいる不利な点を次のように対照してみた。

バランスシートの作成を通して、ロビンソンはどのような境涯にあっても、そこには「我々の心を励ましてくれる何か (something to comfort ourselves)」<sup>6)</sup>があることを実感した。ロビンソンが採用した自己を知るための「バランスシート」は、ヘーゲルがいうところの「感覚的確信」に陥らな

いための有効な手段である。いわゆる「相剋」の方法で客観的に自己を知る機会を得ている。

例えば中国の格言に「敵を知り己を知れば百戦危うからず」というものがある。「敵を知る」という意味は機械的に敵を知るのではなく、自分との関係を通して相手を知るという意味であり、逆に「己を知る」とは相手との関係性から自己をみることである。

さらに、中国の五行思想の考えには「相侮（そうぶ）」というものがあるが、これは文字通り「相手を侮る」という意味であり、「相剋関係」とは逆方向の抑制が起きる状態である。五行の中のある一行が、本来ならば抑えられる（剋される）立場であるにもかかわらず、逆に相手を侮るかのように抑制する状態である。「相侮」の「侮」は、「侮られる、バカにされる」などの意味がある。例えば、通常なら斧（金属）で木を切り倒すことができるのに、金属が柔らかいため木の硬さに勝てずに刃こぼれして使いものにならない。また、通常なら火によって金属を溶かすことができるはずなのに、火力が弱く金属の熔融温度に達することができない。そして、本来なら水で火を消すことができるのに、水の量が足りないために鎮火しない。最後に、木は大地に根を張り養分を吸収できるはずなのに、土の量や養分が足りないため倒木あるいは立ち枯れの状態にある。このように「相侮」とは五行の盛衰が正常の許容範囲を超えることにより、克制を引き起こす現象である。このような状況は一見、都合が悪そうに思えても、今までとは逆の克制があらわれることにより、こちら側の立場だけでなく相手側の立場を理解する機会に恵まれる。「そんなはずではなかった」という状況に追い込まれると、これまで見えなかった自分がみえてくるはずである。

追加的な説明になるが、「相侮」のなかにある「侮」という文字について、左側の偏は「にんべん」だから、人を意味することは容易にわかる。隣の「毎」は、「毎日」という言葉からもわかるように、「つぎつぎと」という意味がある。さらに、部首の「や（矢）のあたまた」、又は「のいち」の成り立ちには申の形があるが、これは草木の茎から枝が左右に出る形を意味する。これを二つ並べた艸（草）が今の「くさかんむり」である。「莓」（イチゴ）という漢字は、草木の下に母がいることで多産を表し、草木の繁殖力に子どもの出産イメージが重ねられている。ちなみに、莓が二つ並ぶと「莓莓（バイバイ・マイマイ）」となり、植物が増えていく様子を表わす。「毎」の旧漢字には下部に「母」の文字が使われており、女体と乳房の象形がはっきりしている。したがって、「侮」の漢字には植物の繁殖力と、人間の多産の二つのイメージがあることがわかる。また、「毎」という漢字は、髪飾りをつけた若い女性を示すという解釈もある。このように、「毎」の文字に数が増えていくイメージが込められている。数が増えるということは、逆に考えれば際だって目立つものがなくなり、平凡で取るに足らないものになる。したがって、「侮」の文字には人の数が多くなり、人を粗末に扱うなどの意味が転じて、無視・軽視の意味になっていく。

さて、人は誰でも周囲から侮られたり、ないがしろにされたりすると、孤独感を抱きやすい。「孤独」という言葉の響きは、日本では「良くない状態」とされ、社会から孤立していることと同義に扱われるようだが、ドイツ人哲学者マックス・シュティルナー（Max Stirner）の「孤独は、知恵の最善の乳母である」という格言にもある通り、必ずしも否定的に捉える必要はないのではないか。孤独は自己をみつめるための契機となり、心理学の側面から言えば「昇華」と称されるものや、芸術面では「創造」活動を促す肯定的な意味もある。孤独感は深山幽谷にたった一人でいる時だけではなく、雑踏にあっても訪れる。「寂寥」といえるような感覚は、三木清が『哲学ノート』の中で語っているように、「孤独は山にはなく、むしろ町にある」といえる。

大学の教養教育では円滑な人間関係を築く方法は教えても、「孤独の楽しみ」を教えることは稀であろう。つながりを求める人がいる一方で、つながりを求めたくない人もいるはずである。しかし、どうやってもこの世は「つながっている」という感覚を持たざるを得ないようにできている。うまく逃げたつもりでも、自分を追いかけてくるものがある。身分を隠したつもりでも、いつのまにか自分を知る人物が目前に現れる。日常生活において、五官でとらえられる客観的事実から、不安や焦燥感、複雑な人間関係に至るまで、あらゆるものがこの「私」につながっている。『聖書』にも「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。」(ヨハネによる福音書15章4節)という言葉がある。この〈つながっている〉という感覚を一度解消させ、「無」を通して「有」を知り、巡り巡って人は何かに「つながっている」ことを再認識させるための教育プログラムがあってもいいのではないか。すなわち、「孤独の重要性」を説く教育プログラムである。新生の「つながり」はより強靱なものとなり、人と人との絆を強固なものにするはずである。

ロビンソンはあらゆる人間関係を「貸し借り」という関係において考え、その間に「正直」(honesty)が如何に大切であるかということを書いていくことは興味深い。これはもちろん、著者であるデフォーがビジネス経験によって得た教訓が反映されているかもしれない。又、先に示した相剋の例からもわかるように、自然界、人間社会は元々、「相生・相剋」でバランスが保たれている。

## 自然との結びつき

孤島において、現実の苦難を受け入れたロビンソンが次に取り組んだのは生活の改善であった。食料の確保もその一つであるが、ある時、大地に大麦が育っているのを目にした。その大麦とは、家禽用の穀物が入っていた袋から偶然、わずかながら地面に落ちたものが、その後には生育したものであった。これを神の思召しと考えれば、ロビンソンの心は少なからず感動をおぼえ、自然に涙が溢れ出てきた。大麦は自然(神)とロビンソンをつなぐ「ムスビ」となった。

I not only thought these the pure productions of Providence for my support, but not doubting that there was more in the place.<sup>7)</sup>

これは神がただひたすら私を助けようとして恵んでくれたものであることはあきらかであったが、同時にまた、このあたりにはもっとそういうものがほかにもあるに違いないと私は思った。

自然界の食べ物を身体にとり入れ、ロビンソンは自然との「ムスビ」(結び、産霊(むすび))つきを強くした。おそらく日本人には「大麦」よりもむしろこれを「米」、特に「おむすび」に置き換えた方がわかりやすいかもしれない。日本の古代人は春の播種から秋の収穫までの間を、精霊の働きを感得して、「ムスビ」(産霊)と呼んだ。産霊(むすび)は「苔むす」の意味で、生(は)えてくるという意味である。「ムス」は霊力が働いて自ら生産される意味であり、「ヒ」は霊力、精霊の意味をあらわす。したがって、「ムスビ」は生産霊(いくむすび)という意味になる。子どもを出産する女性の力は絶大である。生まれた子どもは、男なら「むすびひこ」、そして女なら「むすびひめ」となる。

産霊（むすび）は、生きる力をもった体内へ魂を植えつける、或いは生命のない物質の中へ魂を入れることを意味する。魂が発育し、物質もふくれて成長する。つまり、生命の起こる作用がムスビ（産霊）である。人と人との「むすび」つきも大切であり、生命力が漲るものになる。また、水を掬（すく）って飲むまでの動作を「むすぶ」というが、これも体内に靈魂を容（い）れることを意味する。「おむすび」の語源に関しては諸説あるが、例えば、古事記に登場する三柱の神、つまり、天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巢日神（たかみむすびのかみ）、神産巢日神（かみむすびのかみ）のうち、後の二神に共通する「産巢日（むすび）」を語源とするもの。また、これは日本の山岳信仰にも関連があると思うが、おむすびは元々、山の神をお祭りする時にお供えするものであり、「むすび」の形状が三角形であるのは、山型（神の形）をいただくという意味がある。一方、「おにぎり」の語源は「握り飯」からくるもの、また、「鬼斬り」であるとする説もある。

ロビンソンが孤島において食料確保に力を注いだのは単に自身の生命維持のためだけではなく、その行為が無限の知恵と至高の恩寵に富む神の力の証につながったからである。「神は種もまかないのに奇跡的に穀物を生じさせたのだ、それもただこのような絶海の孤島で自分を生かしてやろうという思召しからなのだ。」<sup>8)</sup> 食料を媒介として、ロビンソンは神との「ムスビ」を得て、そこに精神的な安堵感を抱いたのであった。

## 地図学習を教養教育に

ミルトンの『失楽園』(1667)に描かれている人間は神の意志に背いて楽園追放となり、原罪を背負いながら旅に出る。デフォーはミルトンと同世代とは言えないまでも、それは同じ清教徒が抱いていた人生行路ではなかったか。ロビンソンは「父の忠告にそむいたことが、いわば私の「原罪」である」<sup>9)</sup>と述べているが、そこには「父と子」という横軸の人間関係と同時に、「神と人間」という縦軸の意味が伏線として存在すると見るべきである。ロビンソンが父の忠告に背いたことが今の苦しみをもたらしたと繰り返し述べているのは、このような理由からである。そうであれば孤島でのロビンソンの姿には、〈再生への祈り〉が込められているとも考えられる。人生は旅だという暗喩（メタファー）は平凡だが、人はこの世からあの世への旅人であるとするれば、人は原罪ゆえにより切実な意味を持つ。人生もまた航海によく喩えられる。人生を大海に喩えるなら、我々はまさに自ら帆を広げて風を受け、大海原に船出する小さな帆船である。海上では自分の位置を把握するための目印がないので、最も重要な作業は帆船の現在地と進むべき方位の算出である。進むためには目的地とその方向を確定しなければならない。

これまで今の大学生をロビンソンに仮託して述べてきたが、今の大学生は「時」と「空間」の中でどこに向かえばいいのであろうか。漠然とした言い方かもしれないが、ベクトルの方向が定まらなければ、徘徊を繰り返すことになる。そこで、時と空間における方向性を探る授業、すなわち「地図を読む」学習を大学の教養教育に入れることを提案したい。

周知の通り、ドイツの哲学者イマヌエル・カントは、1756年にケーニヒスベルク大学に地理学研究をとり入れ、退官するまでのおおよそ40年間、「地理学」の講義を続けている。しかも当時の慣例に反して、大学当局が配布した教科書の講釈ではなくカント自身が教程を組織し、様々

な文献から資料を収集した。この地理学教程は主に大学1年生に対して行われたようだが、カントは地理学を単なる入門的なものとする考えはなかった。カントは地理学を「世界認識の予備学(propaedeutic)」とし、また本質的知識を与えるものとして重視した。参考までに、カントの『自然地理学』序論には次のような部分がある。

自然地理学 (physical geography) は、それゆえ、世界の認識の出発点となる部門である。それは世界認識の予備学 (propaedeutic) と呼ばれる理念 (idea) に属する。これについての教育はいまもなお非常に不足しているようだ。にもかかわらず、この知識こそまさに、考えられる人生のすべての諸状況において有益である。したがって、経験によって次第に満たされ、かつ正されていく一つの知識形態として、われわれはそれに精通しておくことが必要である。

われわれは、いわば予備概念 (preliminary) として与えてくれるこの種の教育と一般的概説を通して、世界に関してやがて持つようになる将来の知識を予想する。我々は、これまで多くの旅行した人のことを、その人は既に世界を見た、と言う。だが、世界を認識するには、それを単に見る以上のことが要求される。自分の旅行から何かを得ようとする人は、あらかじめその計画を立てておかねばならず、世界を単に外官の対象と見なしてはならない。(中略)

なおも教育に著しく欠けているものは、あらかじめ獲得した知識をいかに使用し、また、それを現在の諸状況の中でいかに実用的な (pragmatic) ものにすべきか、の指導である。<sup>10)</sup>

われわれは、自分自身の経験にのみ関わるべきである。だが、これらの諸経験だけでは、すべてを認識するのに不十分である。というのは、人間は時間の一小部分しか生きのびられないからである。さらに、空間についても、人間は、たとえ旅行をしてみたところで、ほんのわずかしかが経験できないからである。人間は、多くの事物を見ることはできても、すべてを観察し知覚することはできない。それゆえ、我々は、他人の諸経験をも利用しなければならない。<sup>11)</sup>

カントの地理学の講義は相当な人気を博し、その講義を筆記した写本が市中に広がっていたそうである。「地図を読む」学習はおそらく「地理学」という学問分野に含まれるのかもしれないが、実践的なもの、例えばロープ・ワークのように、まずは脳を働かせる学習でもかまわない。学生はプリントに書かれたロープの流れを目で追いながらその情報を脳に伝達し、脳はそれを分析して両手を動かす命令を出す。やがて学生の目の前にはロープによって構成された空間が誕生する。これは平面を立体に変える身体活動であり、視覚活動でもある。

私たちの認識は端的にいえば「説明された知識 (感覚データを伴わないもの)」と「体験を伴う知識 (実際に体験されたもの)」からもたらされるが、地図 (地形図) は経験の前提となり、人はこれを用いて目の前に架空の空間を作り出す。すなわち、地図は空間データの視覚化のための道具として機能する。ものが動くにはそれを動かそうとする意志が存在し、身体が動くのもそれを動かそうとする意志があるからである。“Force arises from dearth or abundance. (力は欠乏または豊かさから生み出される。) 動きを伴えば、まるで岩や水の浸食作用で削られるのと同様に、様々なものに変化が生じる。例えば、人が歩けば草花は踏み倒される。動きを伴うところには必ず変化が生まれる。

具体的な活動としては、学生にまず地図 (地形図) について関心を持ってもらい、その後、2万

5千分の一地形図を示し、次に目的地までのルートを地図上で思案させる。その際、等高線の高さから道の高度差を計算させ、自分に合った道を思案させる。地形図は日本国内であれば国土地理院発行のもの、またイギリスであれば Ordnance Survey のものが使いやすい。

イギリス国内にある Public Footpath の総距離は24万キロ以上ある。つまり、地球6周分に相当するフット（足）パス（道）があり、蜘蛛の巣状に国内に張り巡らされている。イギリス人は老若男女を問わずよく歩く。ロンドンのような都会に住む人でも、休日となれば車や電車で目的地周辺まで行き、そこから歩き始める。イギリスでは歩くことはレジャーというよりも、むしろ文化であると言っても過言ではない。歩くことの先進国であるイギリス人の歩みから、日本の学生が学ぶものが多いと思われる。

## まとめ

哲学者セーレン・キルケゴールは「苦難の福音」と題する講話の中で、「なにか行動をおこすとか、なにかある苦しみに耐えるとか、とにかく人間がなにかを始めようとするときには、まず見積もりをするものである。」<sup>1)</sup>と述べている。キルケゴールが考える「見積もりをたてる」とは、自分の力量と果たすべき務めの釣り合を考量することである。秤の場合、計るためには物体が二つなければならないが、考量する人間も二つのものを計る複合的な存在でなければならない。そして、「考量する」という語は、「計る」、「秤にかけて重さをみる」という意味の動詞から派生するが、人間は秤が計る以上のこと、つまり「超えたところで」(over)「計る」(veier) 意味の「考量」(overveier) すると述べている。

このようなキルケゴールの主張は、ロビンソン・クルーソーが自己内省のために用いた「バランスシート」の手法に似ている。「時」と「空間」の中で、ロビンソンは経験を通して過去の自分との「差異」を生み出し、そしてその差異から自身について「考量」することができたのである。

物事をよく知ろうと思えば、よく歩かなければならない。足を生かすことが優れたシステムである。学生にとって身近な地域を徒歩で歩くことは重要である。なぜなら、歩くことで今ある自分を感じることができるからである。歴史の重みを足・目・鼻（埃やカビの臭い）・口（地域の人との会話）でとらえ、過去と未来のすべてを包括するこの一瞬に、今ある自分を感じるはずである。より良い歩きのためには、「地図を読む」学習をより積極的に大学の教養教育にとり入れるべきではなかろうか。

## 注

- 1) Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (New York: Restless Books, 2019), p.5.
- 2) Ibid., p.7.
- 3) 箴言 30:7 二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。30:8 不信実と偽りを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。30:9 私が食べ飽きて、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないために。また、私が貧しくて、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないために。

- 4) Defoe, op.cit.,p.41.
- 5) Ibid., p.75.
- 6) Ibid., p.76.
- 7) Ibid., p.92.
- 8) Ibid., p.92.
- 9) Ibid., p.239.
- 10) 松本正美訳『カントと地理学』古今書院, 1992, p.346.
- 11) Ibid., p.349.
- 12) 飯島宗享編『キルケゴールの講話・遺稿集4』新地書房, 1983, p.320